

明治初期文學と福澤諭吉先生

——昭和廿五年一月十日、慶應義塾にての講演——（昭和二十六年九月補訂）

柳 田 泉

一 明治初期の文學と福澤先生

明治初期の文學と福澤先生、わたしの考へで申すと、専門化した今日の意味からいふと、福澤先生はどうも文學者ではないでせうが、明治初期の文學についての考へ方からすれば、先生はやはり大きな意味での文學者であつたといつてよろしい。その廣い意味での文學者といふ立場から、先生は、明治初めの文學に非常に根本的な大きな影響をお與へになられたものであります。それでわたしはかねてさういふことを考へてをりましたものですから、これをひとつまとめてをかうと思ひつつ、何かにひまどられてまとめることの出来ない中に二十年四月に戦火にやけてしまひました。もとより多年集めました資料も、一部分をのこしましたのみで烏有となつてしまひました。やむを得ないことではありますが無としてわたしとしては大きな打撃であります。此のたび講演をとのお招きで、この機會にかねての考へをまとめてみやうと存じ、焼けのこりの資料をつぎあはせて、やつともとの考への大すぢをたどることが出来たやうな次第であります。さういふわけで

立派に以上のやうな題をかかげましたものの、まことに頼りないことではあります、暫く御清聴下さるやうお願い申します。

二 戯作文學の革新

明治初期の文學なるものは、大體今日の文學概念からしますと徳川時代に續くいはゆる戯作文學が文壇の中心を占めてをつたのです。戯作文學、草双紙、新聞の續き物……文壇の中心はさういふものでありましたが、文學の概念はまだはつきりきまつてをらなかつた。文に對する武、武に對する文といふやうな大ざつばな考へがまだぬけず、極めてざつとしたものであります。これは明治二十年頃になりました、ややはずきりするのであります。そこでわたしの申す明治初期、すなはち明治二十年以前には、文字で書いたものが何でも文學だといふやうな考へがまだ残つてをる。戯作が中心であります、漢詩、漢文、あるひは和文、和歌隨筆、さういふやうなものが皆はいる。中心はいま申しあげたやうに詩歌や戯作で、その戯作は又、内容が大體空想的な物語りで文章は誇張とマンネリズムで固めたやうなものであつた。それが

明治維新といふ大きな變動があり、また當時西洋のいろいろな新しい文化・文學がはいつてきてさういふものの影響を受け、戯作文學がだんだんかわつてきます。それが幾段もの變遷を経、だんだん變つて来て、ちやんとした明治式文學になつてくる。これがまづ明治初期文學の大勢であり、文學革新の大勢でもあります。さうして、わたしの考へによりますと、この初期の文學革新について、先生が直接間接、意識無意識に根本的な作用を及ぼしてゐる、そのことの大體を申し上げたいのであります。もちろん前に申したやうに、先生は今日の意味から申しますと普通の文學者ではないのでありますが、結果から見ますと、先生の御意志がいづれにあるとしまして、一二の革新論者がやりました仕事よりも先生のお考へになつたことが、當時の文學に對して極めて根本からの作用を與へてゐることは事實なのであります。

三 ものを書く權利

まづ文學といふことをひろく解しまして、明治の文學一般に對する福澤先生の根本的な功績といふことを考へますと、誰でも申すことは、文章の革新といふことであります。これはただごとと文章をやさしくした、平易化したと申すことで、何でもないことのやうですが、さうではありませんで、當時としてはこれだけでも立派に革命的な意味をもつたものであります。當時のことを多少とも知つてゐて、このことを考へますと、これは非常に大きな意味での文學革新的な意味を持つてをつたと思ふのであります。武家の時代にをきましては、ものを書く權利が武士と僧侶と

學者といふものにあつた。それを先生が打破して大衆のものにした。大衆にものを書く權利を解放しました。明治の文學がある意味で平民の文學であり、平民が天才を文學上に發揮できるやうになつた根本が、今申しましたやうに福澤先生がものを書く權利を平民の手に取りもどしたといふこと、これが一つの大きな土臺になつてゐると思はれます。言文一致もやがてここから生れてくるわけであります。さうしてものを書く權利は、やがてこれは思想の權利であります。でありますから、これは、よほど大きな文學革新的な意味をもつたものと思はなければならないのであります。

四 文章でも大天才

この際、福澤先生の文章革新といふものの意義を大きく力強いものとしたことは、先生ご自身がすぐれた文章上の天才を持つてをられたといふことであります。このことがないと、たとへ先生が文章革命を唱へても、その力が幾分か弱かつたらうと思ひます。いかに巧みにのべたてたところで、イヤさうはいつても、それはあの人が文章が下手だからだといはれてしまひます。ところが先生は、まれに見る文章上の天才をもつてをられました。これが何ほど先生の文章革新につよい助けとなつたかわからんのであります。

抑も福澤先生には文章上の遺傳といふものがあつたといつてよろしいので、父君百助氏も學問文章ともにすぐれてゐたし、また親類から高谷龍洲先生（二葉亭四迷の先生）のやうな文章にすぐれた學者を出してをります。さういふ點で先生の文章の天才は遺

傳に出るものが多かつたでありませう。それはともかく、先生の文章の妙については、例へば六十年の昔、徳富蘇峯が極めて公正な批評をしてをります。蘇峯の評は「『文字之教』を讀む」と題しましたもので（二十三年四月「國民之友」）「文學者としての福澤諭吉君」と副題がしてある。さうして、此の時代にさう解してゐたやうに、この文學者とはもつぱら文章家としてのことでありませう。蘇峯の人物事業については種々の批評があると思ひますけれども、文章の一點にかけては、彼も又一時の天才であり、一種の文豪であることには何の疑ひもありません。蘇峯自身かく文豪とよばれるに値ひするだけ、他人の文章をみる眼は實にたしかであります。その蘇峯が、しかも極めて自尊心の強い筈の壯年時代に、福澤先生の文章を天下の至文としてほめてゐるのですから、先生の文章は、單に文章としても實に立派なものであることは異論の餘地がありません。もちろん蘇峯が論の土臺にしてゐる『文字之教』は、大綱は先生の文章平易化の主張を示したものでありますけれども、その文例は、單に平易な文章の書き方を教へたといふ以外に、文字のつかひざまに言外の諷刺がありまして、それが實に妙を極めてをる、蘇峯も主としてこの點をもとにして先生の文章をはめてをるのであります。例へば『文字之教』附録第十六段）

私儀此度親類相談の上學問のため東京へ罷出同處浮世小路堅板水四郎君の周旋を以て明穀町一丁目有名堂無實先生方へ入塾致候處中々盛なる學校にて塾生の數三萬三千三百三十三名當時雇人の外國教師は英人「シユウメイカル」米人「セイロル」の兩

人日本教師は洞尾福太郎吳摩嘉七郎摺子義一郎先生等七八名にて日々教授被致候

これをよむと、一應は平々他奇のない文章であるが、心をつけて味はふと、その諷刺の妙は何ともいへないのであります。文學の先生の名を見られよ、シユウメイカル、セイロル、何ぞ皮肉なるやです。更に洞尾福太郎、摺子義一郎の名をよむに及んでは、當時の世相が實に躍如たるものがあるではありませんか。時代の穴と言ひますか、何といひますか、そこを實にうまく書いてある。これを見ますと、時代そのものの空氣が如實に浮かんでくる。しかもこれは、ただの文例としてかかれてゐるのです。

この『文字之教』は先生の文才をみます上の一つの例でありまして、先生の文章がこれに盡きたといふのではありません。人のよく知つてゐます『世界國畫』學問のすすめ『文明論之概略』『福翁自傳』などを讀みましても、先生の文章の才が大したもので、言達し、意つきてやむ、といったところがあるのがわかります。殊に『文明論之概略』の文章は、わたしは、理の文章の模範といつてよい堂々たるものと存じます。

福澤先生の文章の主張は、手とり早いものでは、舊版福澤全集の緒言で見られるのでありますが、これを簡略にしますと、その蘭學の師緒方洪庵のやり方にヒントを得て文章の平易化につとめ漢文調を俗語俗文で打ちこはし、雅俗めちやめちやに混合して、唯早分りに分り易き文章をつくるといふ主旨をのべてをります。ところで、先生の書きました文章をみますと、ただ俗語俗字俗文で文章を平易にしただけではない、具體的、見るままに書く、空

想主義を排斥して人生、人間の生活に即せよとするといふ特色がある。抽象的、空疎ではない、現実的である。先生の平易化といふことには同時に此の意味をもつてゐます。この點について、わたしの手もとに焼け残りの資料がいくらかある中、先生の作文論といふものが一つあります。それは明治二十一年一月二十二日慶應義塾の演説館で演説したのを筆記したものだとのことでありますが、その中にかうあります。

凡そ文章は有りの儘の事を有りの儘に寫すを以て能事とす、例へば信州の奥か何かに、未だ曾て硝子壺コップを見ざる人ありとして扱て今硝子壺の有りの儘を寫して、未だ之を見ざる其人にも硝子壺と云ふものは斯なるかと解せしむるやうに書くこそ能文と云ふ可し、又文章を作るには常に能く心掛けて他人の文章を見るべし、例へば人より來りたる手紙など幾回となく之を讀みて其拙を見出し其巧を取るべし、又何人の文でも用捨なく批評し古人が何と評したる者にも決して之に雷同する勿れ云々

此の前段が殊に面白いと思ひます。有りの儘を有りの儘に寫さうといふところです。これは然し實は大さうむづかしいことでありまして、文章の至れるものでなければかうは参りませんが、それはともかくとしまして、福澤先生は平易化といふほか、具體的、現實的にかくといふことを考へてゐたといふことがこれでよくわかると思ひます。わたしの考へによりますと、此の作文論といふものは、此のとき先生が急に思ひついたものではないのでして、大方以前から考へついてをつたことを、このときにのべたものと思ふのです。これはただこれだけ讀みただけでは、それが革

命的なものであることがよくわからないと思ひますが、これを當時の日本の實際の文章に比較して見て始めて、此の作文論がいかに革命的なことを要求してゐるものかといふことがわかつて思ひます。當時の日本の文章といふものは、空想的文字が多く、書くことがないのに無理に文字をならべてつづるといふ有様でありました。さういふ文章を考へて此の主張をみますと、先生の文章論がいかに革命的なものを要求してゐるかといふことがよくわかるのであります。

さて先生の文章について、それではほめた批評ばかりで非難したものはなかつたかといひますと、それはあります。文章を俗したといふことは昔からいろいろな人が盛んに申ました。然しこれは先生もいつてをりますやうに、意識的に俗したのでして、いはば時文の漢文調なところに反抗的にやつたのです。先生は武士でありながら、しかも武士でも一番りつばな武士的な心をもちながら、わざと町人らしくふるまつたものでありますが、それは町人の代に武士の皮をかぶつた武士の心をもたぬにせ、武士の多かつたことにいや氣がさしたためであります。文章でもその通りでして、わざと俗文を借りて文章を現實に近づけるといふことをやつたものであります。要するに、先生は文章論の組織的なものを表面に出して文章革新をやらなかつたから、感化の大きいわりに人が氣がつかずにすんでゐるが、先生の文章革新の事業が、つまるところ明治の文學革新の有力な土臺になつてゐるのであります。

以上のやうな文章上の革新が、當時のやうに、文章即文學とい

ふやうに考へられてゐた時代に、いかに大きな作用をしたかといふことは容易に察せられます。ところで先生の影響は、以上のやうに文章の上だけに限らず、文學の内容についても根本的に深くかつひろく働いてをるのでありまして、聲を大にしていへば、先生こそ明治初期文學の革新に比類のない第一石を下したのだといつてよろしいやうに思ふのであります。

五 文學より急ぐ事

前にのべましたやうに、先生は今日のやうな意味での文學者ではありません。また今日いふ意味での文學を天職としてをつたかたではありません。先生御自身の生涯の事業としてをりましたことは、當時の日本の國民生活の革新、その土臺となる國民思想といふものの革新、舊來の非常に不合理なものに對して合理的な思想を注入する。西洋文明による合理的なものを注入することによつて、當時の日本が持つてをつたところの不合理なもの、あるひは封建的なもの、進歩的な生活に入るのに邪魔になる一切のものを排して、新しく行くといふことが、先生の生涯をかけた事業であつたわけであります。さういふ立場からして、先生が全面的に文學のことはあと回しでよろしい、文學よりも急しなければならぬものがあると考へられたことは當然のことである。この文學といふ考へ方には、當時の戯作はもちろん、詩文のやうないはゆる風流文字をみな含んでゐるわけですが、とにかく、先生はかういふ文學は日本の現状からして急にせずともよろしい、後廻しにすることだといふことをのべ、日本としては

まづ實學思想を徹底させ、實學思想で日本人の生活をかためることが第一の急務と叫ばれたのであります。先生のさういふ考へはもう明治以前の著作の『西洋事情』にもほゞ見えてをりますが、明治早々にかきました「建置と經營」(織福澤全集第一卷)の文章にはつきりと出てをります。いはゆる文學のやうな風流文字は、日本では相當發達してゐるから、今日ではあはてて力をいれる必要はない。これはすてて置いてよろしい、日本にはそんなものよりもずつと急なものがあつたといつて、實學思想、合理主義、その他の徹底の必要を説いてをります。更に『學問のすすめ』をみましても、『文明論之概略』をみましても、この主旨が大體わかります。

然しここで注意すべきことは、先生は文學後廻し論で、文學否定論ではないのであります。後廻し論といひましても、その受け取り方によつては随分否定論になりかねないのであります。先生は正面から文學を否定するといふことは申されてをりますが、先生が文學を全面的に否定してをらないことは、上述の『學問のすすめ』の文章でも、また『文明論之概略』でもわかります。文學は人を悦ばせて重寶なものだとか、戯作も政治諷刺といふ仕事をやる効があるとか申してをります。また明治九年三月の講演(奢侈論のつづき)では、文學の必要を肯定してをられます。先生のはどこまでも文學後廻しで、否定論ではない。然し文學を否定するといふ考へ方が、明治の始めに、先生のお考へとは別に、當時の思想界方面の一部にあるにはあつた。おもに儒教關係の學者が今の文學は役に立たぬから、文學を政府の力で止めさせたは

うがよろしいといふふうな事を建白したものであります。或は志士風の人物もさういふ建白をしてゐる（明治六年、大和の人樺井藤吉の上書の場合）。先生の場合はそれと違ひまして、文學より急にするものがある。思想の革新は生活の革新なり、日本が新しく世界の舞臺に生きて行くためにはその方が急である。かういふお考へを持つてをられました。先生が文學否定といはれなかつたのは先生がやはり何と申しても文學に關心をもつてをられたからであらうと思ひます。關心と申すより個人的嗜好と申した方がよろしいかも知れません。先生は西洋の小説のやうなものは、殆んど讀まれなかつたやうであります。日本や支那の文學にも嗜好をもたなかつたとはいへません。先生は左傳を十數回くりかへしてよんだといふ。左傳は支那文學の大物の一つです。また馬琴の『八犬傳』の文章をこつそり愛讀してをつたといふうはさもありません。ですから個人的にはいはゆる風流文字もわかるし、食はずぎらひといふのではない。ないが、國家の現状、國民生活の進歩といふことを考へると、そんなものにふけるのはいかぬと考へたわけです。それで、自分も文學に近づくことを主旨にするのはもちろん、お弟子の方々のこれに近づくのを好まれない。また世間一般の人が、風流文學、戯作文學を好まず、實學の嗜好をもつて、これと取りかへてくれることをのぞんだものです。

六 文學會員に警告

明治十六年の夏、こちらの學校（慶應義塾）で有志の方が文學會といふものを結成して雑誌を出された（文學會雜誌）。その第二

號に、先生が「文學會員に告ぐ」といふ演説の筆記らしいものを載せてをります。これが文學に對する先生の態度を一番はつきり示したものでありませう。その内容は、文學という文字の意義、その意義の解釋からしていろいろな誤解が生じて來さうだから一言する。文學會の會員の文學といへば、英語のリタラチュアで、從來の考へでいへばシナ風な詩文のこのやうに考へるであらう従つて文學會といふと、從來のやうに、支那風なやりかた、すなはち風月に吟じ、詩文を弄するやうな風流文學の會と思はれがちであるが、これは日本の進歩にとつて恐るべきことである。およそ文學を風流詩文とのみ考へるのは、古い考へ方の文學である。今日の文學といふものは、文明の進歩になんらかの意義がなければ文學の存在の意義がない。文明の進歩といふことは、人間の生活の中で、ナチュラル・ロー——自然界の原理といふ意味でせう——このナチュラル・ローが支配するところの領分が日に月に廣まつて行くことである。その文明の進歩といふことに貢獻しないものは文學といへない。

このところに、さきほど申しました明治の初期に於いては、文學の觀念といふものが大變廣かつたといふこと、それが出てくるのでありますが、さて先生の考へによりますと、世の中にはアートとサイエンスとがある。これはともに人の生活を助けるもの（廣い意味で）であります。先生はアートに對しては技術といふ字をあて、サイエンスといふ言葉に對しては實學といふ言葉をあててをりますが、技術といふのは今日いふ實際の技術のことではありませんで、これは今ならむしろ藝術とよんでよろしいもので

あります。昔は文明が進歩せぬので此のアートの方で萬事間にあつてゐた。まづ人生を支配するものはアートだと申してもよろしかつたでせう。ところが文明が進歩するにつれて、サイエンスが人生を支配するやうになつてきました。先生の言葉を引きますと技術と實學とは自ら異なりと雖も昔時「アート」と認めたる者の中にも原則の所在を發見して其「サイエンス」に屬すべきは勉めて之に編入するこそ今日文明の進歩と云ふべきものなれ現實の勢ひとして申すと、アートを出来る限りサイエンス化してサイエンスの原則に人生を支配させる、それが世の文明に赴く道だといふわけであります。

然るに、此の文學會の出來ました當時は、その逆にアートが勢ひを得る傾向にありました。先生のいふやうに「支那流の文學を貴び器具を愛する風漸く盛なる」如き有様であります。この際文學會を開くと、餘程注意せぬと此の風に賛成するのではないか、アートを愛するのではないかと誤解をうける。それであつてはならんといふのであります。西洋ではかういふアートを好む風があるといふが、それは十分サイエンスが普及した西洋が自分のもないアートに眼をつけるのはよろしいが、サイエンスの足りない日本人がその眞似をするのはとんでもない話である。今日の文學を研究するものはサイエンスをもつて第一にしなければならぬ。そしてアートのもつてゐるものの中でサイエンスの方則で説明できるものは、なるべくそれで説明して、そしてアートのほうのものをサイエンス化するのが今日の文學の急務である。いはゆるアートといふものは、先生のお考へでは、前にも暗示してあります

やうに、シナ風の詩文を弄するとか、風月に吟ずるとか、いはば今日の文學の意味に近いものを指すわけです。先生は實にかういふ空疎な漢學、風流文學などに反抗して起つた方でありますから表立つてはさういふ風流文學の根源であるシナの文學を全面的に排斥してをります。なるほどシナ文學がわが國の文明の要素であつた事は、それは昔のこと、今日はもう進歩の大害物となつた。

これを除かざれば眞の實學思想は發達せぬ道理だから、これをあくまで除くのが文明の道である。それなのにいささかでもそんな文明の敵をたのしむことは何事であるかといふのです。(この文學會とはちがひますけれど、塾生の中にも多少の風流心のある人士がをりまして、漢詩の雜誌をつくつたことがあつた。先生がそれを知ると、その雜誌を皆とりあげて、その仲間に大眼玉をくはせてその雜誌にかかつた金だけは辨償してやつたといひます)。それで、先生によると、文學がもし文明になつた文學であるためには、その中にサイエンスがなければいかぬ、さうしないと文學といふものは文明の進歩に利益を與へないものである。先生は風流の文學、すなはちアートの方の文學などにふけるものは文明の仇敵だといふやうなことをいつてをります。さうなると、文學會の正しい在り方はどうなるか。さしむきはサイエンスの講論となるわけでありまして、また實際此の會の雜誌は大體さういふ内容のものになつてをります。が、先生のいはゆる原則として、それを世間一般にもちだすと、それは何うしてもアートのサイエンス化といふことにならざるを得ません。語をかへていふと、日本の從來の文學はアートの文學である。シナ文學に學び、そこから風

流をまねたアートの文學であります。一時、これをなくして、身代りにサイエンスをはやらせることが出来れば大によろしいわけだが、さうはいかないとすれば、文學を文學として、文明的に生かすには、サイエンスを吹き込むよりほかに仕方がない。かういふことになります。

七 戯作に科學注入

以上のことはアートをサイエンスにする、つまり、文學に對して科學を入れる、文學の科學化といふお考へは、文學會員に告ぐといふ演説をなさいました明治十六年夏に、卒然として考へつかれたことではないのであります。もつと古く、七八年ほど前、明治八九年頃でありますか、先生が中心でお弟子方を使つて出された「民間雜誌」(家庭叢談の改題)といふものがありますが、それを見てみますと、文學技術欄といふものがある。

その文學欄といふものに何が書いてあるかと申しますと、今日普通の考へから申せば文學欄といふからには、小説乃至詩歌、童謡、少くとも和歌ぐらゐ書いてあるだらうと思はれるかも知れませんが、さういふやうなものが一つもない。書かれてをることは大體自然科學、自然現象のことばかりであります。今日の言葉でいふ理科に關することが書かれてをる。いはゆるサイエンス、さういふものを文學欄として特別に出してをる。一例を挙げますと大きなタラヒの中に水をいつばい入れて、その中に棒を突つ込むと水面のところで棒が曲がつて見える、それはどういふわけかといふことを説明してをる。さういふわけでありますから、サイエ

ンスをもつて文學としたい、またさうすべきだ、といふお考へを先生がだいたい前から持つてをられたことは、その邊からも分かつてきます。サイエンスをもつて文學とするなどといふことは、今日からみれば、或は奇怪千萬のやうに思はれるかも知れませんが明治の初めの頃は、文學の觀念も學問の觀念も分化してをりませんので、いづれも文字でかかれたものといふので、武に對する文さういふ考へから、アートの文學もサイエンスも同じやうに文學と考へられるやうなこともよくあつたのです。現に先生の「家庭叢談」などでは、文學といふ文字にサイエンスとわざわざフリガナをつけてつかつたりしてゐる例も見えてをります。さういふわけでありまして、サイエンスを文學とするといつても、當の先生も聞く世人も、さう大して不思議とは思はなかつたのであります。先生のかういふ考へが、明治十六年に思ひついたものでないといふことを證するものが今一つあります。明治八年の五月に先生の高弟の一人である猪飼麻二郎といふ人が慶應義塾の演説館で演説をした、そのときの筆記といふのが本人の筆でのかつてをりますが、それは「文學技術の變遷を論ず」と題されてをります。その大旨を述べますと、今日日本人で風流文學の衰微を悲む人があつて、それはまちがつてゐる。これは悲しむよりむしろ喜ぶべきことだ。文學美術を風流なものとして考へるのは、それは古風な考へで、今日では文學はサイエンス、美術はユースフル・アートとなつてこそ始めて文學美術として生きられる。即ち文學をサイエンスにすることこそ日本文學の新紀元であるといふのであります。用語は少しちがひますがけれども、文學會員に警告した先生の文句

と大體同じことであります。そこで問題は、先生の明治十六年にやつた演説は、明治八年に猪飼氏のやつた演説をうけ賣りしたものでどうか、少くともヒントをここに得たものでどうかといふ點であります。これは辯ずるまでもない、獨立自尊を尊んだ先生が十年近くも前の自分の弟子の演説をこつそりかゝるなどといふことは考へられもみません。これは、恐らくこの當時福澤先生がいつも口にしてゐた意見であつたものを、猪飼氏が多少尾ひれをつけて自分の演説としたと見る方が正しいでせう。それで此の演説は猪飼氏のものでありますけれど、いろいろと考慮してみますと、むしろ福澤先生が古くからかういふ意見をもつてゐたといふ一傍證となるものであります。

さて以上のやうな思想をもつてゐた先生が、當時の戯作文學を十分讀んで批評されたら、さぞ面白い批評が出来たらうと思ひますが、先生はさういふものをあまり涉獵してゐられませんでした、残念ながらさういふ批評を續々とくり出して先生の意見の裏打をするといふことは、只今のところわたしには出来ません。然しさういふ批評が全然ないかといふと、ないわけではない、一つ二つはあります。そこで、その一つだけを見本に出します。先生の著書で『民情一新（明治十二年）』の第三章、世界の交通が大發達をして、それが文明開化の大きな原因の一つになつてゐることを説いてあるところに、かうかいてをります。これから先の戯作小説では、父母の行衛をもとめてもわからないとか、骨肉の兄弟や刎頸の友達が無らざる異郷であつて、一別の年月に初めて再會したなどといふ趣向は全く使へなくなつてしまふ。また距離の遠いこと

をたとへて西は九州薩摩から北は津輕蝦夷松前などといふが、そんなことも意味のないことになつてしまつたと申してをります。全く先生のいはれる通り、戯作にサイエンスが入ると、從來の日本小説の二大趣向とも申すべき仇討とか、主家の寶物の詮議などといふことはつかはれなくなつてしまふわけで、これはたしかに戯作小説界の根本革新を意味するものであります。これでも當時の戯作文學にいかにかサイエンスがなかつたか、といふことがほほわかるとおもひます。

八 比類なき一石

以上大體申しあげましたやうに、先生の御仕事としては、事文學に關することはいはば片手間の仕事のやうなものであるわけですが、しかしその結果から見ますと、非常に大きい根本的な影響を與へてをる。空想一點張りの戯作文學の中に科學を入れてそれを生かしていくといふふうな革新の第一石は、先生が打つたと申しあげるほかないのであります。かういふことをかうはつきり言つた人は、先生以前、文學に關係した人の中にもなく、また當時の思想家なり、先驅者なりの中にも今のところまづ見當らぬのでございます。

當時、諸事日新、日々新の世の中にをきまして、文學即ち戯作小説だけが依然とした舊思想、舊技巧をくり返してをつた、いはゆる風流の空疎なアートで、何ら新時代にうつたへるものをもたない、すつかり現實はづれのした遊びになつてをる。それが先生の此の叫びで、大に覺醒された。文學をサイエンスにしろ、文學

にサイエンスを入れる、文學の科學化です。さういふ叫びに愕然として驚いたわけであります。福澤といへば當時は何といつても一代の指導者です。その地位斤量、今日の批評家などと比較にならぬものがあります。その福澤がかういふ意見をもつてゐるとわかつた時、戯作小説の方で動搖を起さないわけにはいきません。いかに片手間仕事だと思つても無視は出来ません。況んやその意見が正しいものをもつてをるに於いてをやです。そこで動搖に閉口した戯作者がやがて悲鳴をあげ始めます。もつともこれは何も福澤先生の意見にのみ動かされたといふのではありませんが、福澤先生を中心としたいはゆるインテリ連中の文明開化的意見から戯作文學が大きな刺戟をうけたわけであります。その悲鳴を一つ二つ見本に申し上げます。

元來戯作者が不安状態になりましたのは、もつと前からであります。つまり明治維新の大事件、それにつづく日本開化文明開化の大芝居に出あひまして、彼らは生活の根本から動かされたものであります。彼らは生活的にも文學的にも、ほとんど時代の大勢と何のタツチももつてゐなかつたといつてよろしい。それでこの現實に打ちあたつて愕然としたが、さて一時はどうしていいかわからない。魯文のやうな眼さきのきく人物は、早速文明開化讚美の戯作をつくつて方向の轉換をはかつたけれども、さううまく轉換の出來た人ばかりではなかつた。その多くは惰性で筆をとつてゐたものの、何うしていいかわからなかつたのです。明治五年の三條の教憲が出て、それを戯作の指針とすることになつたが、これも間もなく消えてしまふ。大に心細かつたでせうが、幸ひ五年

以後新聞が盛んになつて救つてくれたものです。さうしてやつと立ち直れると思つたところが、この實學思想乃至文明開化思想から改めてうんとたたかれることになる。嘘を生命の戯作者側では悲鳴をあげざるを得ないわけですから。さてその悲鳴の例を出せば（ただ今は手もとのノートにあるものだけから）——明治十二年七月、篠田仙果は「演舌者草稿洋本郎、合巻の双紙弄をのしる」といふ一文の中で、洋本郎をしてかういはしめてをります。戯作といふものは開化の世には有害無益なもの云々、双紙弄はこれに對して辨解はしてをりますが、その辨解はつまり受身でありますそれより痛切なのは、明治十三年五月、足薪翁こと柳亭種彦（萬島藍泉）が書いた「文明開化は小説安を害す」といふ一文です。小説安とは治安といふものをまねたので小説界の安寧といふほどのこととせう。その大意は、かう文明開化の聲がやかましくてはもう小説も戯作も書けない。古來の小説の趣向が、文明開化の鏡で照らされると皆つかへない。仇討も寶物探しもつかへぬし、戯作小説の第一の趣向ともいふべき怪談の趣向などテンからものにならぬ。そこであとに残つたものとしては因果の道理といふものだけだ。これだけはいくら文明開化でもうちこはすことができないから、今日の戯作小説はこれを中心にするべきである云々（明治十五年六月の「因果應報」の一文参照）。藍泉は明治十三年ごろはまづ戯作方面では大家ですのに、その大家がから悲鳴をあげてゐるのですから、一般がどれほど此の文明開化といふものに閉口したかわかるとおもひます。それでもちろんこれを機に斷然戯作の足を洗つた人々もあります（例へば前に出た仙果など）。藍泉は、以

前から開化の世界をそのままかくことにつとめて来た人でありましたが、これからは出来るだけ戯作にサイエンスを入れるつもりになったと見えまして、『怪談深閨屏』(明治十七年)のやうなものを書きました。これは怪談的な趣向で種々人の恨みとかたたりなどの出る小説ですが、それが皆悪人の神経病のせみだとのべられて解決となつてをります。此の程度の合理主義でも、戯作文學としては精一杯のサイエンスであつたのでありませう。

さて御承知のやうに、明治の新文學は、明治十八年の坪内逍遙の出現によつてその方向が定まつたとなつてをります。逍遙はまづ革新理論として『小説神髓』をかき、ついでその實踐として、『當世書生氣質』をかきました。その『小説神髓』の新しいところはどこか、全體が新しいわけでありませうが、特に云々されるのは、その上巻でノヴェルとロマンスの區別を教へたこと、小説の主眼は人情にありと力説したこと、文學の獨立のことなどいろいろの點が革新的主張となつてをります。然しこのうちで小説の主眼を人情とするなどは、逍遙より前にものべた人々があり(藍泉など)、必ずしも逍遙の發明ではない。また文學の獨立云々も、いろいろとのべた人々があり、これも逍遙の獨創ではありません。ノヴェルとロマンスの差を論じて世界の小説、従つて日本の小説もつひにノヴェルとなるべきを論じた一段こそ、逍遙の千古の卓識といふべきであります。下巻はそのわりに重く見られないのですが、その脚色、性格の論でいかにも文明開化時代の科學的やり方をつかつてゐるところが大に面白い。即ち脚色にて合理主義を主張し、また自然的筆法を力説してをり、性格でも合理主義を主

張してをります。この點、何も逍遙が福澤先生から直接に學んだといふのではないが、歴史的にいへば、先生から糸をひくものがあるやうに存じます。

前に申ましたやうに、福澤先生の大事業は、國民思想の革新による日本の更生であります。その事業の大なるに比し、先生の文學の方の仕事は小さいやうに見えます。然しこれは文學が當時としては社會的に小さく見られてゐたせゐでありまして、文學が社會的に大きく認識されてくるにつれて、その革新的意義が大きくなつて參ります。従つて先生としてはたとへ片手間の仕事であつたにせよ、先生の明治初期の文學に與へた感化影響は、まことに大きなものがあります。此の點に於いて、福澤先生の打つた革新の一石こそ、坪内逍遙の出る前に於いて、何人も企て及ばなかつた比類なき一石でありました。比類なき一石、——さうしてその革新のもたらした結果のあるものは、逍遙のそれとは別に、あとあとまで永く明治文學史上に生きてをるのを見るのであります。

(以上)